

【旧約聖書日課】創世記 9章8～17節

<sup>8</sup>神はノアと彼の息子たちに言われた。

<sup>9</sup>「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。<sup>10</sup>あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。<sup>11</sup>わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」

<sup>12</sup>更に神は言われた。

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。<sup>13</sup>すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。<sup>14</sup>わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、<sup>15</sup>わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。<sup>16</sup>雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

<sup>17</sup>神はノアに言われた。

「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

【福音書日課】ルカによる福音書 11章33～41節

<sup>33</sup>「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。<sup>34</sup>あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい。濁っていれば、体も暗い。<sup>35</sup>だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。<sup>36</sup>あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、ともし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている。」

<sup>37</sup>イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。<sup>38</sup>ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、不審に思った。<sup>39</sup>主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。<sup>40</sup>愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。<sup>41</sup>ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。」

## 虹のしるし

11月を迎えて、わたしたちの教会は今年も、再来週に「オープンチャーチ」を実施しようとしております。わたしたちの心を開き、扉を開き、思いを開いて、教会に一人でも多くの方をお迎えすることを目的に「オープンチャーチ」を行うようになって、今年で三回目です。まだまだわたしたちの教会の身の丈に合った形を手探りしながら、試行錯誤しながらですが、そのようにしながら、わたしたちの教会の「オープンチャーチ」の形ができて上がってくるのだらうと思います。「オープンチャーチに行けば、石神井教会がどのような教会か、一目でわかる」と言ってもらえるような「オープンチャーチ」を造り上げていくことができればというのが、わたしの願いです。しかし、本当のことを言えば、将来、「オープンチャーチ」が「もう必要ない」とされるようになることこそが、望ましいのでしょうか。教会は本来、一年に一度の「オープンチャーチ」の日だけでなく、すべての日曜日、すべての日に、どなたに対しても開かれているべきだからです。

旧約聖書日課（創世記）は、「ノアの物語」のクライマックスです。「ノアの物語」は、ノアとその家族と選ばれた動物たちを乗せた箱舟が神の起こされた大洪水を潜り抜けた物語として、よく知られています。箱舟に乗ることのなかった他の人々や動物たちは、洪水の水の中に飲まれてしまった。ただ、「神に従う無垢な人」（創6:9）として神の好意を得たというノアとその家族だけが救われた。そのように描かれていることを、皆さんもすぐに思い出していただけるでしょう。子どもたちを前にしたメッセージであれば、「さあ、だから、わたしたちもノアのように神に従う無垢な人になって、神のご用意くださった箱舟に乗りましょう」と呼びかけて結びとする物語かもしれません。

けれども、分厚い聖書の、まだ初めの初めと言ってよいところに置かれたこの物語は、どうやら、それだけでは終わりません（それだけで終われるならば、聖書は10ページで十分です）。地上に生きる人間の罪や悪を拭い取るために起こされたという大洪水を逃れて、箱舟から再び地上に降り立ったノアたちに、神が一つの決意をお示しくださった。「**永遠の契約**」を宣言してくださった。それは、二度と洪水によって罪や悪にまみれた地上を滅ぼすことはない、というもの。その契約のしるしとして、神は雲の中に虹を置いてくださった、というのです。

そのことが告げられる今日の日課箇所でも、まず言われていることは、この神の決意が、箱舟に乗って洪水を逃れたノアたちだけを対象にしたものではない、箱舟に乗った者たちはもちろん、そこに乗ることがなかった「**地のすべての獣**」を対象にしたものだ、ということです。洪水の物語を教訓にして「**箱舟**」に乗る者になることこそが救われる道かと思ったら、そうではない、というのです。神は、箱舟に乗った者も、そうでない箱舟に乗らなかつた者も、皆同じように対象にして、「あなたがたを、その罪や悪のゆえに滅ぼすことはない」と言われるというのです。空の**雲の中に虹**を見たら、そのことを思い起こせ、というのです。

## 箱舟の扉は開かれて…

先週、わたしたちの教会では、一人の教会員ご家族の葬儀を執り行いました。かつて 40 年ほど前には求道者として教会に通ってくださっていたこともある方ですが、教会全体にお知らせすることはいたしませんでした。葬送式は、この礼拝堂ではなく、ご自宅近くの斎場での式で行いました。大勢の地元の方々が参列されている中に、教会からも 10 人ほどが加わってくださっていました。讚美歌を歌い慣れていない多くの人たちの中で、大きな声で讚美歌を歌ってくださる一群がある。揺るぎない口調で詩編を唱え、主の祈りを口にしてくれる人たちがいる。その様子を目の当たりにしたとき、斎場での式であっても、そこは確かに、教会の祈りの営みとされているのだと、司式をしながら思いました。

教会は、信者の葬儀はもちろん、信者の家族の葬儀も執り行ってきました。けれども、多くの場合、遠慮があるようです。信者でない者は教会で葬儀をしてもらう資格がないのではないか、と思われているのかもしれませんが。わたしは、牧師として、もっと積極的に、皆さんの家族の葬儀が教会の営みで執り行われるようになったらよいと思っています。それが当たり前になったらよいと思うのです。「教会での葬儀は嫌だ」というときに無理やりする必要はありませんし、別の選択肢が明確にあるのならば、そうなさるべきでしょう。しかし、積極的に拒む理由がないのならば、ぜひお考えいただきたいと思うのです。

それは、もちろん、教会の葬儀件数を増やすためではありません。わたしたちが信じる神がどのようなお方なのかを示すためなのです。

ノアとその家族が神に命じられて建設し、乗り込んだ箱舟は、神の起こされた大洪水を潜り抜けて、再び地上に据えられました。そして、その扉は開かれました。そのとき、神を礼拝するノアたちに告げられた、あの宣言、神の決意、永遠の契約は、わたしたち教会に告げられているものでもあるのです。

かつて、教会堂が「箱舟」の形を模して造られた時代がありました。教会は、ノアの「箱舟」のように、神の注がれる水を潜る者たちの群れだ、という自己理解からでした。「ペトロの手紙一」には、ノアの「洪水」は「洗礼」を指し示すものだということが書かれていますから、「箱舟」が「教会」を指し示すという理解は、初代教会の時代からあったのでしょうか。しかし、その「箱舟」は、永遠に扉が閉じられて水の中を漂うものではありません。水の中を潜ったら、再び地上に据えられて、その扉が開かれるものなのです。そして、あの神の宣言、神の決意を、「永遠の契約」を聞く。それが、教会なのではないでしょうか。

箱舟に乗って水の中を潜った者たちが、この神の宣言を聞く者なのです。他の者たちは、聞いているのか分かりません。聞いていないのかもしれない。けれども、わたしたちは、これを聞く者とされているのです。それは、この神の宣言を、あのすべての者に向かって伝え、分かち合う役割がある、ということではないのでしょうか。「あなたたちと…後に続く子孫と」、「あなたたちと共に居るすべての生き物、…あなたたちと共に居る鳥や家畜やすべての獣…、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と」、分かち合う役割、その責任があるのです。

## わたしたちの器の中から…

箱舟の扉は、開かれます。教会の扉は、開かれます。わたしたちの扉は、開かれるのです。開かれた扉から、わたしたちは、出て行く。出て行って、神のあの宣言を告げ伝える。教会に加えられ、箱舟に乗って水の中を潜らせていただくことになったわたしたちこそが、箱舟の外の人々に向かって、「もはや箱舟の内と外に区別はない、差別もない」と、言わなければいけない。神が、箱舟に乗るノアたちに託されたように、わたしたち教会に加えられた者たちにも、ご自分の決意を託して下さったからです。

何と光榮な役割ではないでしょうか。何と榮譽に満ちた使命ではないでしょうか。それは、「天国行きの箱舟の切符」を得られるかどうか、というだけの問題ではないのです。それは、天の上のことではなく、地の上のことなのです。水の中を潜り抜けて地上に再び据えられた箱舟、地の上の教会が、この地の上で為し得る役割、この地の上でこそ為すべき使命、なのです。大きく開かれた箱舟の扉、決して閉ざされることのない教会の扉。それこそが、あの神の決意をこの地上で実現することにつながるのです。

教会に、信者だけでなく、その家族も知人も隣人も、いいえ見ず知らずの人たちも、だれでもが皆出入りするようになる。生まれてから死ぬまでの地上の営みを、教会の交わりの中でなされる。それが、ノアのと時から告げられている神の御心であるはずです。

それによって教会の純粹さが失われる、などとケチな考え方をする必要はないと思います。そもそも、わたしたち信者だって、随分といろいろな者の集まりなのです。罪も悪もあって、それを赦されてきた者たちの集まりに過ぎないのです。にもかかわらず、どんなに汚れているように見える者さえ、神が清めてくださる、主イエスのゆえに聖なる者としてくださる、と教えられてきたのではないのでしょうか。

今日の福音書日課（ルカ福音書 11 章）で、最後に主イエスが「**ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる**」とされています。わたしたちの**器の中にある物**。内側にあるもの。わたしたちの手の中にあるもの。それを明け渡して、他の人に渡してごらん。他の人と分かち合ってごらん。そうすれば、あなたたちの見るものはすべて、清くなる。神が清めてくださるものとして見るようになる。

自分の器の中にある物を後生大事に抱え込んでいるわたしたちに、主イエスは、さあ、扉を開きなさい、中にある物を出してしまいなさい、他の人に渡してしまいなさい、とおっしゃるのです。富も、名譽も、誇りも、です。

頑ななわたしたちの扉を、開きましょう。主がお開きくださるのですから、開きましょう。開かれた扉、開かれたまぶたを通して、わたしたちの中に、神の光が差し込んでくるのです。わたしたちが、すべての人、すべての者と、神の祝福を分かち合うようになるときは、もう間近なのです。